
シンポジウム

論題 中世哲学におけるアリストテリズム

——エチカを中心として——

司会 九州大学 松永 雄二

提題：アリストテレス倫理学の両義性とトマス・アクィナスにおけるその受容と変容——アリストテレスの「賢慮 (φρόνησις)」と「倫理的徳 (ἠθικαὶ ἀρεταί)」・トマスの「倫理的徳 (virtutes morales)」と「神学的徳 (virtutes theologicae)」——

東京都立大学 加藤 信朗

提題：トマス・アクィナスにおける倫理学の概念

九州大学 稲垣 良典

(於 同志社大学 1987. 11. 22)

司会

松永 雄二

このシンポジウムは、「トマス・アクィナスにおけるアリストテレス倫理学の受容と変容」という主題を、まさに倫理学の成立そのものにかかわる問として、つまりは「倫理的な思索の場というものが一体どこにあるのか」という問として問いなおしていくという点に、その大きな特色をもった。そしてその際最初に語られたことは、アリストテレス倫理学の孕む両義性（或いは三義性）において、倫理的な問題の主眼は往往にして近代から現代にかけて、「われわれは何をなすべきか」という行為にかかわる選択の原理の考察に向けられたにしても、しかしアリストテレスにとって倫理学とは本来的にエートス *ἦθος* にかかわる学的探究にあつたのであり、つまりは「その人が現にどのような人であるのか」という事柄が、まさに問題として探究されるという所に、倫理的思索の一番の基幹があるという、そのことの確認であつた。

そこで問題は当然、「アリストテレス倫理学における「徳」論の、トマス・アクィナ

スによるその受容と変容」という事柄に、一つの主要な焦点を見出す。しかしここでも最初に注意されねばならないことは、この問題がいわばギリシアの市民社会において賞讃の対象となった個々の個別的な徳が、いわゆるキリスト教的社会において如何にその評価が変容した何が新たにつけ加えられたかという問題では、本質的には、決してないということである。否、問題はそのような個々の徳目の評価ということではなく、それはむしろおよそ徳 (*ἀρετή*-virtus) が徳として成立するその根拠にかかわる問題地帯が、トマス・アクィナスによって如何なる仕方を受容されかつ変容されたかという点にあったのである。

そしてその時、まさに *connexio virtutum* という問題の場所において、*caritas* という徳のもつ意味が、提題者によって極めて的確に指摘された。ここで注意されるべきことは、この「*caritas* なしにはあらゆる徳は *imperfectae* である」という言葉が、決して「*natura* と *gratia* の二段階説を語る言葉ではなく、それはまさに「よき人になる」というそのこと自身がどこで成立するかという *bonum* の問題として、そしてそれは同時に、「人（つまりは魂）があるということ」が何か全一的に把えられる地帯が如何にして開かれるかという問題の考察としてあったということである。そしてそれ故に、それはアリストテレスの徳論の場所を内的に——つまり単に超越的にはなしに——超える把握としてあったのではないか、ということが鋭く指摘されたのであった。そしてこの問題提起は、当然のことながら討論の場で様々な反響を生み、トマス・アクィナスの倫理的思索——否もつ的確に言えば存在と善にかかわるかれの思索——の成立場面について、例えば『神学大全』全体の内的構造をそこからどう読み解いていくかという問題などについて、貴重な示唆が語られたのであった。

さてしかしこのシンポジウムで主として時間の制約上、問題としては意識されながら、それ自身としては直接考察されなかった事柄も、尚残されているといわねばならない。そのうちでおそらく最大の事柄は、*ultimus finis*・*beatitudo* 論と *virtus* 論のかかわりを、アリストテレス及びトマス・アクィナスにおいてさらに厳密にどう解いていくかという問題であろう。——この問題に関して、トマス・アクィナスの思索の根底には、「人間は自然本性的にかれに固有なる自然本性を超える善・究極目的へと秩序付けられているという、究極目的の超越性についての洞察」があるということが、提題者の一人によって強く主張された。そしてこのシンポジウムの問題提起をさらに今後展開させるた

めのものとして、そのような洞察から、倫理学上のいわゆる目的論的立場と義務論的立場の交錯を如何に解き明していくかについての考察が、改めて問題として提出されたのである。

その意味で、このシンポジウムは決して完結したものであったとはいえないであろう。しかしおおよそすぐれた対話・討論がそうであったように、このシンポジウムもまた、哲学的思索がそれ自身として成立するその場の意味を問う、一つの真実の初まりをもち得たことを、学会としてよろこびとしたいのである。

提題

アリストテレス倫理学の両義性と
トマス・アクィナスにおけるその受容と変容
——アリストテレスの「賢慮 (φρόνησις)」と「倫理的徳
(ἡθικαὶ ἀρεταί)」・トマスの「倫理的徳 (virtutes mo-
rales)」と「神学的徳 (virtutes theologicae)」——

加藤 信朗

I

アリストテレスの名は倫理学の領域で体系的な思索を残した最初のひととして記憶される。アリストテレス倫理学の含む問題性としてその両義性、または、その三義性が指摘される。倫理学が一つの学問的知識であることには異論がないであろう。しかし、倫理学が何の知識であるのか、また、倫理学の知識は何を目標しているのかという点について、次の二つ、または、三つのことが考えられる。

- (1) 倫理学とは「善いひとであるとは何であるのか、あるいは、何によってであるのか」の知識である（現に善いひとであることに人間にとっての最終目的、つまり、幸福があるという点についても異論はないと信ずる。したがって、倫理学は幸福が何であるかの知識である）。
- (2) 倫理学は「善いひとになるために、ひとは何をなすべきか」の指針を各人にあたえる知識である。
- (3) 倫理学は「ひとを善いひとにするために、政治家は何をなすべきか」の指針を政治家にあたえる知識である。